

「倭の五王」時代の東アジア情勢

メモ)鉄本 2024.02.20

1. 3～5世紀の中国大陸情勢

- ①【西晋(265～316)】中国では3世紀の魏・呉・蜀による三国時代の後、魏に代った西晋が中国統一を為したが、五胡の乱により西晋は滅亡(316年)。
- ②【東晋(317)/南朝宋(420～479)】その後、華北の五胡十六国と、西晋の皇族であった司馬睿(元帝)が再興した華南の東晋に分裂した。東晋ではその後も混乱が続き、東晋の軍人であった劉裕(後の南朝宋の初代皇帝武帝)によって滅ぼされた(420年)。南朝宋は420年から479年まで続く。
- ③【北魏(386～534)】一方、華北では五胡の1つである鮮卑の拓跋(たくばつ)部が戦乱を治め、これを継承した拓跋珪(後の北魏初代皇帝道武帝)が国号を魏(三国時代の魏と区別するため北魏、又は、後魏という)と定め華北統一を為した(439年)。北魏は政権の不安定化により東西に分裂(535年)。
- ④【南北朝時代】南朝では宋⇒齊⇒梁⇒陳と続き、北朝では北魏⇒東魏/西魏⇒北齊⇒北周と続く。南北朝時代は隋(581～618年)の中国統一(589年)により終わる。



【参考】
五胡とは、匈奴、羯(けつ)、鮮卑、氐(てい)、羌(きょう)のモンゴル系、トルコ・ツングース系、チベット系の異民族。
十六国とは、匈奴=3ヶ国、羯=1ヶ国、鮮卑=5ヶ国、氐=3ヶ国、羌=1ヶ国、(漢族)=3ヶ国。

2. 3～5世紀の朝鮮半島情勢

- ①【三韓時代】3世紀頃の朝鮮半島は、北西部には漢の影響下にあった楽浪郡から公孫氏が分割した帯方郡、南部には韓族の74余りの小国の連合体である三韓(馬韓、辰韓、弁韓)が存在した。
- ②【高句麗(前37年頃～668年)】紀元前後、鴨緑江支流の渾江流域にツングース系の扶余族が部族連合国家を形成しはじめ、半島北部を中心に領土を広げ、4世紀に入ると中国の混乱期に乗り、313年楽浪郡を陥落させ、391年には広開土王(談徳)が高句麗第19代の王として即位した。427年第20代長寿王が平壤に遷都し、475年には百濟の王都漢城を落とし、漢江流域を制圧した。5世紀前半頃から高句麗の仏像形式は百濟や日本に影響を与え、570年より日本と正式な国交が始まり、文化交流が盛んになった。

668年に新羅・唐連合軍によって高句麗は滅亡した。

- ③【三国時代】一方半島南部では、4世紀に入ると楽浪・帯方郡の滅亡を機に、三韓諸国は統合に向かい、馬韓は伯濟国を中核に百濟(4世紀前半～660年)を建て、辰韓は斯盧国によって統合され新羅(4世紀中頃～935年)となった。弁韓の地では、加羅諸国と呼ばれる小国分立状態が続いた。
- ④【百濟(4世紀前半～660年)】百濟は396年以降、倭国と同盟して高句麗の南下を阻止したが、内部の貴族連合体制の変化による王権の弱体化と高句麗の攻撃の為に475年に王都漢城が陥落した。6世紀初頭の武寧王(在位501～523)の代に、加羅諸国の支配権をめぐり新羅と対立し、これを打開するために大和王朝と国交を開いた。660年に新羅・唐連合軍に破れ、後に、百濟再興軍が戦ったが白村江の戦いで日本の軍の敗北により百濟は滅亡した(663年)。
- ⑤【新羅(356年～)】新羅は5世紀前半まで倭や高句麗に王都を占領されるなど苦難の時代が続く。5世紀後半になると、倭や高句麗の勢力を排除しながら洛東江中流域(半島南東部)に進出し、北方スキタイ文化や中国文化の影響を受けた新羅文化を形成し、三国時代最大の版図となっている。6世紀に入ると、百濟の勢力を排除し伽耶諸国を支配下に治めた。
- ⑥【統一新羅(～935年)】白村江の戦に続く668年には新羅・唐連合軍が高句麗を滅ぼしている。670年から676年まで唐と対立し、旧百濟領内の唐軍を駆逐し、新しい統一新羅の時代を作った(676年)。6世紀中葉から7世紀後半までの時期、日本と唐の厳しい対立があり、新羅と日本の関係は緊密であったが、8世紀に入り、唐と日本の関係が修復され新羅と日本の関係は疎遠となった。9世紀前半以降全国で反乱が相次ぎ、第56代敬順王が高麗(918～1392年)の王建に降って新羅は滅亡した(935年)。
- ⑦【高麗(918年～1392年)】9世紀末以降、半島では地方豪族が台頭し動乱状態に陥った。その中で豪族王建が有力豪族弓裔を倒して高麗を興す(918年)。

202	8	25	220	265	304	439	581	618	907	960	1127	1271	1368
弥生時代			古墳時代		飛鳥	奈良	平安時代			鎌倉			
			3世紀頃		6世紀末		710	794				1185	1336
			弁韓 辰韓 馬韓		任那 新羅 百濟		新羅			高麗			
箕氏朝鮮 夫余			楽浪郡・帯方郡 高句麗		高句麗								
前1世紀頃			4世紀半ば		676		918						



3. 冊封(さくほう)体制

冊封とは、東アジアにおいて、中国の皇帝が周辺諸国の首長に対して冊書(さくしょ)・称号を授け、国王に封じることによって外交秩序を形成する体制のこと。

【郡国制】 紀元前206年に中国を統一した漢王朝は、中央には「**郡県制**」を敷いて直接支配し、地方には在地有力者を配する「**封建制**」とした。有力者らは**王**或いは**侯**と称され、その治める地域は**王国、侯国**と称され支配権は世襲された。この2つの制度を併せたものが「**郡国(ぐんこく)制**」である。

一方、領域外の異民族の首長には、外臣として官職を授け君臣関係を結んだ。中国と諸国とは**宗主国と藩属国(冊封国)**という名目的な君臣関係になる。冊封国は、中国皇帝に土産の物を献上して「君臣」の礼をつくし(朝貢)、皇帝は多くの返礼物を回賜(かいし)し、大国の威徳を示した。藩属国の王は、自身の地位の正当性を中国から認められることで、自国内の王権の強化・安定を図るために冊封に応じた。

魏・晋代(4世紀末)までは、中国王朝に親しみを表す「漢委奴國王」(=漢の倭の奴の国王)、「親魏倭王」(=親魏である倭の王)などの外臣特有の**官爵が授与**されていた。

南北朝時代になると、周辺諸国の首長に対して都督(ととく)・將軍・刺史(しし)・太守のような**軍事権や行政権を示す称号**が与えられた。日本(倭)では、卑弥呼、倭の五王の他、1404年(応永11)に足利義満が明の永楽帝から「**日本国王**」に冊封されている。

【南朝梁(502～557)の梁職貢図】 古代中国皇帝に対する周辺国や少数民族の進貢の様子を表した絵図である。朝貢した倭人の姿も描かれている。 中国国家博物館に収蔵。



【倭国使】

【百済国使】



【絵図にある注釈文】

倭国在帯方東南大海中依山島居自帯方循海東乍南乍東對其北岸歷三十餘國可方餘里倭王所??在會稽東氣暖地温出真珠青玉無牛馬虎豹羊鶻(欠落 a)面文身以木綿拈首衣横幅無縫但結(欠落 b)
 (欠落 a)は、「男子皆黥」か?
 (欠落 b)は、「束相連略無縫」か?

【注釈文の解釈】

文面はほぼ『魏志倭人伝』の記述内容を踏襲している。
 ①倭国は帯方郡の東南大海にある。
 ②気候は温暖で真珠・青玉を産す。
 ③牛馬虎豹羊鶻はいない
 ④男子は入れ墨、木綿を頭に掛け、布は横幅で縫うことなく結束している。

百済の使者に比べ、倭の使者は裸足で服装も貧相に描かれている。(『魏志倭人伝』の記述の影響か?)

4. 南朝宋の將軍号序列と「倭の五王」の冊封

南朝宋の將軍号序列と倭の將軍号除正の変遷は以下の通り。

南朝宋における將軍号の序列 (五品まで)

品秩	將軍号
一品	大將軍
二品	驃騎・車騎・衛、 諸大將軍
三品	四征 (征東・征南・征西・征北) 四鎮 (鎮東・鎮南・鎮西・鎮北) 中軍・鎮軍・撫軍 四安 安東 ・安南・安西・安北 四平 (平東・平南・平西・平北) 前・左・右・後 征虜・冠軍・輔國・龍驤
	左衛・右衛・驃騎・遊擊 左軍・右軍・前軍・後軍
	四品 寧朔 建威・振威・奮威・揚威・広威 建武・振武・奮武・揚武・広武
	五品 積射・彊弩 鷹揚・折衝・輕車・揚烈・寧遠・材官・伏波・凌江

同品の中の
 順位は
 征 > 鎮 > 安
 > 平となる。

【將軍号の除正状況】

五王名/年代		將軍名	王名	軍職名
讃	申請			
	承認範囲			
陳 (438年)	申請	安東大將軍	—	都督
	承認範囲	安東將軍	倭國王	×
済 (443年)	申請	—	—	—
	承認範囲	安東將軍	倭國王	—
済 (451年)	申請	—	倭國王	都督
	承認範囲	安東大將軍	—	都督
興 (462年)	申請	—	—	—
	承認範囲	安東將軍	倭國王	—
武 (478年)	申請	安東大將軍	倭國王	都督
	承認範囲	安東大將軍	倭國王	都督
武 (479年)	申請	—	—	—
	承認範囲	鎮東大將軍	倭國王	都督

【参考】都督とは;地方の軍政を統べた総司令の意味。

①438年の除正: 安東將軍、倭國王に除される。又、**倭隋**等の随員13人に対して、**平西、征虜、冠軍、輔國將軍号**に除正することを求め、承認されている。倭隋は安東將軍の1級下の平西將軍を除正されており、また、「倭の五王」と同じ「倭」姓であることから王族かつ副王という解釈がある。

倭の支配国として、**百済、新羅、任那、秦(辰)韓、墓(馬)韓**を求め、**却下**される。

☞ 倭國王の序列は三品であり、級は異なるものの随員と同じ序列になっており、南朝宋から見ると、倭王の権力が配下と比べて突出したものではないということを物語っている。

②451年の除正: 従来通りの安東大將軍に除正される。随員23人に対しては、將軍号・郡太守号が除される。倭の支配国として、新羅、任那、**加羅、秦(辰)韓、墓(馬)韓**を求め承認される。

☞ この時、安東大將軍に進号したかどうかは歴史学者の意見が分かれている。

5. 中国史書上の「倭の五王」渡海記録と除正記録について

西暦	倭の五王の朝貢	登場人物	史料	備考	史料の重	日本書紀等の記録	紀年論による歴代天皇
400	倭が新羅王都から逃却	倭人、安羅人	好太王碑				
404	高句麗、齊方にて倭を破る		同上		同上		
407	倭が新羅王都を攻撃		同上		同上		
【倭の五王の時代】							
413	①東晋・第10代安帝に朝貢	倭使	『南史』倭国伝 『梁書』倭伝	東晋王朝(317~420) 420年劉裕(武帝)が宋(南朝)を開く			
421	②南朝宋・第1代武帝に朝貢	倭使	『宋書』倭国伝 永初2年	南朝宋途国の祝賀遣使	南朝梁		仁徳
425	③南朝宋・第3代文帝に朝貢	使の使者として司馬曹遵	『宋書』倭国伝 元嘉2年	司馬曹遵は中国系渡来入地方の産物を献上	南朝梁		
430	④南朝宋・第3代文帝に朝貢	倭使	『宋書』文帝紀 元嘉7年	倭国王が使者を送り産物を献上			履中
438	⑤南朝宋・第3代文帝に朝貢	倭使 倭使の弟珍(弥)の使節: 倭使ら13人 随員には、平西、征南、冠軍、輔國將軍の除正を求め奉記される。	『宋書』倭国伝 元嘉15年	倭使:使持節都督倭・百濟・新羅・任那・東越・東夷六國諸軍事、安東大將軍、倭国王と自称し除正を求め。⇒安東大將軍・倭国王に除される。	南朝梁	【参考】都督とは、地方の軍政を統べた総司令の意味。(冊封の項を参照)	反正
443	⑥南朝宋・第3代文帝に朝貢	倭国王が使節を派遣し奉記	『宋書』倭国伝 元嘉20年	安東大將軍・倭国王に除される。	南朝梁		允恭
451	⑦南朝宋・第3代文帝に朝貢	倭王倭済(文帝の表記)	『宋書』倭国伝 元嘉28年 『宋書』文帝紀	使持節都督倭・任那・加羅・東越・東夷六國諸軍事を加え、安東大將軍に除し、随員23人に軍号・都号が除される。 安東大將軍倭王倭済、号を安東大將軍に進める。	南朝梁		
460	⑧南朝宋・第4代孝武帝に朝貢	倭の使者	『宋書』孝武帝紀 大明4年	倭国が地方の産物を献上		461年:百濟武寧王の誕生 "六月丙戌朔、卒暹羅加須利曹言、於筑紫各羅縵童兒、仍名此兒曰曷曷"(曷曷=武寧王)	安康
462	⑨南朝宋・第4代孝武帝に朝貢	倭王倭死す 倭王の世子眞 帝紀には「倭国王世子眞」	『宋書』倭国伝 大明6年 『宋書』孝武帝紀	眞の即位遣使 安東大將軍・倭国王の号を得る。 倭国王眞を安東大將軍と為す。	南朝梁	468年(南朝宋の泰始4年戦による年代):[神功皇后52年] "久臣等從千熊長彦語之、則獻七枝刀一口"	
477	⑩南朝宋・第8代順帝に朝貢	倭使	『宋書』順帝紀	地方の産物を献上		471年:獲加多支直大王(磐石山古墳の鉄剣)	雄略
478	⑪南朝宋・第8代順帝に朝貢	倭国王眞死す 倭国王の弟武	『宋書』倭国伝 昇明2年 『宋書』順帝紀	武の上表:使持節都督倭・百濟・新羅・任那・加羅・東越・東夷七國諸軍事、安東大將軍、倭国王と自称し除正を求め。 ⇒使持節都督倭・新羅・任那・加羅・東越・東夷六國諸軍事、安東大將軍、倭国王に除す。 地方の産物を献上 安東大將軍と為す。	南朝梁	475年:高句麗により百濟の漢城(現ソウル)が陥落	
479	⑫	倭王武	『南齊書』倭国伝	倭王武の号:安東大將軍から鎮東大將軍に進む。	南朝梁	479年:南朝宋の滅亡	5

6. 冊封制度からの離脱

倭国の外交が「武」以降に低下する背景には次のようなものがある。

- ①5世紀末の東アジアの変動 479年南朝宋の滅亡 ⇒ 南齊(479~502)建国 ⇒ 梁(502~557)建国
新王朝成立の記念昇進: 武は、鎮東大將軍に昇格(479年) 征東大將軍に昇格(502年)
= これらの昇進について朝貢の有無は不明。朝貢の前提なく建国記念として一齊昇格の可能性あり。
- ②倭国の支配体制が確立し冊封を必要としなくなったという可能性
根拠: ・稲荷山古墳の鉄剣の金錯銘に「左治天下」 ・江田船山古墳大刀の銀錯銘に「治天下」
- ③倭国内の政治的な混乱
安康天皇の暗殺、星川皇子の乱、清寧天皇崩御後の皇位空白と飯豊青皇女の執政、
継体天皇即位前後の混乱(⇒混乱を避ける「大兄制度(世襲化)」が出来る)など
- ④607年に第2回遣隋使が煬帝に送った国書「日出處天子致書日沒處天子無恙云云」は、倭国の大国意識による、冊封体制からの脱却を意識したものと思われる。

7. 『宋書 倭国伝』など中国史書の中の倭王の表記について

書名	編集王朝	撰者	「日本」の呼称	首長の呼称(自称は除く)
『魏志』倭人伝	西晋	陳寿(233～297)	倭人	卑弥呼＝「親魏倭王」
『後漢書』倭伝	南朝宋	范曄(398～445)	大倭 倭	邪馬台国の人物＝大倭王 帥升＝「倭国王」
『宋書』倭国伝	南朝梁	沈約(441～513)	倭 倭國 〃 〃	讚＝「王」の表記なし 珍＝「倭国王」 濟＝「倭国王」 興＝「倭国王」、「倭王」 武＝「倭王」
『南齊書』倭国	南朝梁	蕭子顯(489～537)	倭国	武＝「倭王」
『隋書』倭国伝	唐	魏徵(580～643)	倭奴国、倭国	阿每(アメ)＝「倭王」

・各史書には、「倭」と「倭國」、「倭王」と「倭国王」という2つの表記が見られる。

[仮説] 政治体制(郡国制、官僚制、軍隊など)が整った状態は「倭国」、未整備状態の場合は「倭」か？

【参考1】滇王之印(てんおうのいん)

滇(てん)は、楚の將軍莊躡が雲南省滇を征服した後に、秦の大軍に包囲され退路を断たれ、莊躡は当地に土着する形で滇王と自称した。滇は約400年続くが、前漢の武帝の攻略に合い、滇王は投降し臣下として参内した。武帝は滇王に引き続き滇国の統治を許し金印「滇王之印」を授けた(「封建制」へ組み込み)。その後、滇国は「郡県制」に組み込まれ、漢王朝と一体化する。



金
高1.8、辺長2.3、重90g
1956年、雲南省晋寧県石寨出6号墓出土
前漢時代・前100年頃



* 志賀島出土の金印は、一辺が2.35cm 重さが108.73g

